

今回はハウス/ディスコ関連書籍で手許にあるものをご紹介します。

- [1] ビル・ブルースター／フランク・ブローン著／島田陽子訳 『そして、みんなクレイジーになっていく——DJは世界のエンターテインメントを支配する神になった』プロデュース・センター出版局、2003年
- [2] 野田努『ブラック・マシン・ミュージック——ディスコ、ハウス、デトロイトテクノ』河出書房新社、2001年
- [3] ティム・ローレンス著／内垣聡子ほか訳『ラヴ・セイヴス・ザ・デイ——究極のDJ／クラブ・カルチャー史』ブルース・インターアクションズ、2008年
- [4] メル・シェレン著／浅沼優子ほか訳『パラダイス・ガラージの時代——NYCクラブカルチャーの光と影』(上下)ブルース・インターアクションズ、2006年
- [5] ティム・ローレンス著／野田努監修／山根夏実訳『アーサー・ラッセル——ニューヨーク、音楽、その大なる冒険』ブルース・インターアクションズ、2010年
- [6] 横森理香『ニューヨーク・ナイト・トリップ』JICC出版局、1992年
- [7] ロラン・ガルニエ／ダヴィッド・ブラン＝ランベール著／アレックス・プラト訳／野田努監修『エレクトロショック』河出書房新社、2006年
- [8] ダヴィッド・フロ&マティアス・クザン著／山田睿子訳『マシーンズ・メロディ——パリが恋したハウス・ミュージック』DU BOOKS、2014年
- [9] 高橋透『DJの1/4代』リットーミュージック、2007年
- [10] 宮沢章夫『東京大学 [80年代]地下文化論』講義』白夜書房、2006年

[1]と[2]がDJカルチャー／クラブカルチャーの鳥瞰図を描いているので、大きな見通しを得たい向きにはまずこれから。

[3]と[4]はロフト／パラダイス・ガラージを中心としたニューヨークのクラブシーンを描いたもの。ただし[3]の著者はシーンの当事者ではないのに対し、[4]は「west end」レーベルのオーナーというズバリど真ん中の当事者という違いアリ。ともあれいずれも時代の空気をとらえた秀逸な記述。[5]と[6]もニューヨークの当時はテーマとする。

[5]はパラダイス・ガラージやwest endとも関わりの深かった異端のチェロ奏者／現代音楽家の生涯を描いた一冊、[6]はパラダイス・ガラージ全盛期のニューヨークに行き享楽的に遊ぶ日本人女性を主人公にしたバブリーな芳香の漂う小説作品。

[7]と[8]はフランスでクラブミュージックがどんな具合に広まっていったのかを教えてください。いまでこそダフト・パンクを生んだフランスとはいえ、80年代末から90年代前半ころにはクラブミュージックはアンダーグラウンドな、すぐにも壊れそうな細々としたシーンでしかなかった。[7]はガルニエというトップランナーがみずからの歩みを振り返るもので、フランスのクラブミュージックシーンのズバリど真ん中の人物だけに他には書けない内容の濃い一冊。[8]はダフト・パンクとも親しいという人物の手による「マンガ」フランスクラブミュージック史」。フランス独特のバンド・デシネによる表現は日本のマンガとも異なる微妙な淡いで歴史を可視化させることに成功している。

日本のディスコ／クラブカルチャー史を知るには[9]を。最近「決定版」というのが出た[10]は[9]の背景となる時代を知るにはうってつけ。

* * *
[1]～[10]の本は、多少前後するとはいえほぼ似たような時代の出来事なので、同時代のことか意識しつつ読んでみると、ニューヨークがこうなっているときにフランスでは、東京ではということが見えてきて面白いかなと思います。今回紹介した以外にもききもつといういろいろ関連した本があることでしょう。あなたのおススメについて次回ぜひこのプレスで健筆をふるってみませんか。

最近、すっかり音楽事情に疎くなってオッサンになったことを実感する日々を過ごしています。ツタヤがピックアップするメジャーな邦楽アーティストのこともほとんどわかっていません。一方、1970年代の音楽はまったくリアルタイムではないのに、現行シーンより親近感がわいてしまう不思議をどう説明すればよいのか困っています。というわけで、購入する音源の80%は中古のレコードですが、たまに新品にも手を出します。しかし、やはりその多くが旧譜のリイシュー(再発)かコンピレーションだったりします。

今年リリースされたもののなかで印象的だったものを2枚紹介します。ひとつは和製シティポップの金字塔的作品であるSUGAR BABE(山下達郎や大貫妙子などが在籍していたバンド)の『SONGS』(1975)40周年記念リマスター盤。このアルバムは僕のオールタイムフェイバリットでオリジナルのLPとCDを既に所有していましたが、今回、条件反射的にリマスターLPを購入してしまいました。もちろん、素晴らしい内容なのですが、個人的に推したいのはLPではなくCD。40周年記念CDにはLPには未収録のLIVE音源とREMIX ver.が収められています。特にLIVE音源は瑞々しさが溢れていて、涙なしには聴けません。

もうひとつは、UKの優良レーベルHonest Jon'sからリリースされた浅川マキのコンピレーション『MAKI ASAKAWA』です。浅川マキは1970年前後から1990年前後にかけて活躍したシンガー。2010年に心不全で亡くなっています。浅川マキは土俗的でありながら都市の退廃的な雰囲気も併せ持つ独特の雰囲気の特徴。あまりにも濃いキャラクターなので、これまで敬遠気味だったのですが、Honest Jon'sのコンピレーション盤はデザインもよく、丁寧なライナーノーツは日本のサブカル史としての資料価値も高いものになっています。肝心の内容ですが、ジャズピアニストの山下洋輔と一緒に録音していた時期の音源が極上。借り物ではない和製スピリチュアルジャズといった雰囲気でしょうか。浅川マキから派生して最近では山下洋輔もチェックしたりしております。

前者はオーヴァーグラウンドの、後者はアンダーグラウンドのカリスマ的存在といえそうですが、いずれも1970年代の日本の都市の薫りが濃厚に漂っていて、同時代を生きていなくともタイムスリップするような感覚を味わえます。

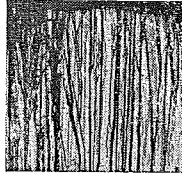
information
<p>早いもので師走になりました。今回は名古屋のClub Magoを中心に活動するAPOLLOを3年ぶりにfeature。collectiveでのプレイは2回目ですが、前回と同様、フロアをあたためてくれることでしょう。APOLLOのDJは20:00～22:00です。是非お楽しみください。</p> <p>次回コレクティブは来年春の開催を予定しています。詳細はブログでご確認下さい。 http://blog-collective.blogspot.jp/</p> <p>それでは少し早いですが良いお年を!</p>

press collective

最近にお気に入り音源5選 “APOLLO”

ゲストDJのAPOLLOに最近のフェイバリットをピックアップしてもらいました。アンビエント・現代音楽からジャズに至るまで幅広いセレクションですが、いずれも繊細な音像が特徴かと。ここで紹介した音源の多くはapple musicやbandcampでもチェックできるので、気になる方は是非(tawaki)。

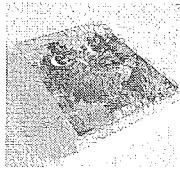
- (1) Bing & Ruth
City Lake
Rvng Intl.
2010



- (2) Kamasi Washington
The Epic
Brainfeeder
2015



- (3) Cornered Yet Climbing Featuring Kelly Jayne Jones
Fevered Realities
Tombbed Visiond
2015



- (4) Floating Points
Elaenia
Pluto
2015



- (5) Lubomyr Melnyk
Rivers and Streams
Erased Tapes Records
2015



冬にかけたくなる曲 “mackiart”

こんにちは。今年も残すところあと1ヶ月弱！2015年は私にとって本当に学びの多い一年となりました。みなさんはいかがでしたか？今回はそんな年末の忙しい時に一息つける音楽をセレクトしました。特に雪が降ったさむーい朝もしくは夜にホットココアでも飲みながら聴いてください。それでは来年もみなさんにとって素敵な一年となりますように。

- (1) Erik Satie
Gnossiennes 1
1890



- (2) Jamie Woon
Gravity
Live Recordings
2007



- (3) Becca Stevens Band
How to love
sunnyside
2011



- (4) Keith Jarrett
Tokyo Encore
ECM
1976



- (5) Kip Hanrahan
Heart on My Sleeve
American Clave
1981



ダンスフロアなカラダとベッドルームな脳 “yu”

上から3枚は子供たちに語り継いでいきたい殿堂入り90s/ハード地味ニマル。通過したつもりで全然できてなかった故ススムヨコタ氏の横顔を偲ぶ別名義ここにきてソッコン中のビョークさんの数ある名リミックス盤から一枚。昨今蔓延している、ブレないことこそが善みみたいな価値観に違和感を持ちながら生きてきたが、アンビエントからラテンハウスとアルバムごとに見事なブレの美学で楽しませてくれるベルトラン先生の一枚。最後はやっぱりTPから一枚。今後も90sという釈迦の掌の上を飛び回る孫悟空のような感覚でやっていくことになるでしょう。

- (1) Rob Alcock & Tommy Gillard
Nature
Continual
1999

- (2) Max Duley
CANAL
ARC
2001

- (3) Planetary Assault Systems
Planetary Funk Volume 5
Peace Frog
1996

- (4) Ringo
Plantation
Sublime Records
1995

- (5) Björk
Violently Happy (Remixes By Masters At Work)
Elektra
1993

- (6) John Beltran
Ten Days Of Blue
Peace Frog
1996

- (7) Seven Grand Housing Authority
Soul Beats
Simply Soul
1993